神話にみる女性

小出卓二

序にかえて

日本国憲法は、男女平等を明記して以来50年、今日女性の活躍が実に目覚ましく、女性時代の到来とまで言われるようになった。

長野女子短期大学で「女性史」に関する講義を担当して9年が終わる。その間、公民館などでも女性講座などで講話も何回となくやらせていただいた。大学の講義や、女性講座などの内容をまとめて文章にしたものの一部が「神話にみる女性」である。

『古事記』の完成は、舎人稗田阿礼の暗習したものを太安万侶が選録献上の712年といわれている。中国の影響を受けていることはいうまでもないが、それより遅れて作られた『日本書紀』(720年)は、製作年代は僅かな違いであるが、遥かに強い影響を受け、体裁も中国史書にならってる。その上、古きものの暗習を基とする『古事記』とは大きな違いをみることができる。従って『古事記』には日本固有の日本人の心が多く織り込まれているとみてもよくないかと思っている。別な言い方をすると、この研究のテーマに関係して女性のあり方が時代が下るとともに儒教の影響を受けるようになっていくが、『古事記』より『日本書紀』のほうが遥かに強くなっているということである。例えば儒教の「夫唱婦随」はどうだったのだろうか。神話の中から女性の生きる姿を、男性との係わりから考えたいのである。

「神話にみる女性」ということは、女神を女性としてみることになるが、日本の神話は神と人の分離型ではなく、神と人とがつながっている型に属することから、神と人とを同じくみてもよいのではないか。従って女神の姿を女性の姿と捉えてもよくないか、そんな立場に立って考察していきたいと考える。

また記紀の神話、説話の史実性については、戦後いろいろ論ぜられてきたが、ここではこの問題とは関係なく、女性の生きる姿を探ってみたい。自然の男女の生きる姿を、記紀の作者は造作しなおす必要は全くなかったのではないかと思うからである。固有の日本人の心がごく自然に書かれているとみたいのである。

1．イザナギノミコト・イザナミノミコト

補いあう結婚　『古事記』(講談社学術文庫)によると、「日本の国生み」に関し(その妹イザナミノミコトに問いて、「我が身は如何に成れる」とのりたまえば「我が身は成り成りて成り合わざる処一処あり」と答え給いき。ここにイザナギノミコトのりたまわく「我が身は成り成りて、成り余れる処一処あり。かれ、この吾が身の成り余れる処をもちて、汝が身の成り合わざる処にさし塞ぎて、国土を生み成さむとおもう。生むこといかに」イザナミノミコト「しかよけむ」と答えたまいき)

この文章は有名な二神の国生みの『古事記』の一節である。結婚は足らざるを補い合うといういわば、補ったり補われたりする相補の原理にたっている。

これに対して西洋文明の元であるアダムとイブの物語では、神はアダムがひとりぼっちで淋しそうなので、アダムの肋骨からイブをつくられ、アダムを慰めるために遣わせられたということであり、日本神話の相い補うという平等観的な考えに対して、男性に奉仕する女性というあり方の違いを表しているものとしてみることができる。このアダムとイブの神話は、その後のヨーロッパ世界を特徴づけることとなっているように思われる。

例えば、欧米の夫たちは、財布を妻に任せることが少ない（米35%、英17%、日本85%は任せる）のもこのことを示しているように考えられないだろうか。女性のこのような従属性からの解放が、今日フェミニズム運動を盛んにさせているのではとも考えられ、ヨーロッパやアメリカの男女の人間関係が、日本と大きく違っている特性を伺い知ることができる。男女がお互いに相補いあうという考えの処には、基本的に男女にはそれ程別がなかったと見てもよいのではなかろうか。

こころみに、『日本書紀』国生み一書（第一）をみると、イザナミは「私の体が……陰（め）の元（はじめ）という一ケ所あります」イザナギは私の体は陽（お）の元（はじめ）という一ケ所あります。私の陽の元をもって、貴女の陰の元のところに合わせたいと思う」ということで陰・陽を合わせるという表現になっている。陰・陽のちがいではあるが、その二つが全く同じ立場であって均衡であるからこそ、大きな意味があるのである。

左右の優先順位　イザナギノミコトとイザナミノミコトとの婚約がなって、いよいよ二神の結婚となる。「それならば私と貴女で、天の御柱をいってめぐりあったところで結婚しましょう」と申され、貴女は右より回ってください。私は左よりまわり会いましょう」と申されて結婚なさったことが記されている。男神が左、女神が右から、ここに優先順位があっただろうか。

岩波書店『広辞苑』によると、(1)右について、（ア）漢代座席を右の方を上としたことから、上位、上席（『太平記』に三浦は千葉が右に立たんこと忿って）転じてすぐれた方（継体記にアラカイが右にいづるひとなし）、（イ）昔左右に別れた官職の右の方、通常左より下位であった。(2)左について（ア）昔左右に分かれた官職の左の方（古く日本では左は右より尊重された）

官職としては唐の律令の官制が大化改新以来確立をみるが、この時以来左大臣が右大臣より上位となったが、それ以前の日本では右が尊重されていたのではないだろうか。言葉としては今日まで右の方が優先しているように考えられるものが多い。右に出る者無し、右にならえ、右の事なかれ主義など、これに対して左前、左巻き、左封じ、左まわり、左むきなどを考えたとき、右が優先されていたとみることができないだろうか。

とすれば、記の「貴女は右よりまわり、私は左からまわり会わん」は、レデイファストとなりやしないか。今私は右と左でどうしても、右に回るほうが自然のように思えてならない。知らず知らずに右回りを選ぶことが多い。商店も入って右側を大事にして商品を並べるという。

『古事記』では、イザナギノミコトが黄泉の国から帰ってその汚れを払うため禊をするが、左の目

を洗われるとアマテラス大神がお生まれになり、右の目からはツキヨミノ神がお生まれになったとある。主神でもあり、持統、元明、元正女帝時代の『古事記』の書かれた律令国家は、唐の官制の左大臣上位に基ずいて、女神（性）の左優先に改めたのであろうか。

右左（みぎひだり）左右（左右）とよむと右が先であったり、左が先になったりする。右左（みぎひだり）は、漢字に国語をあててよむ「くん」読みの読み方で、国語の読み方は右を先に読むことであったからではないだろうか。また「おん」読みは漢字を字音で読む読み方であったので、唐以降の左優先的を表すこととなっていたのかも知れない。

後女神からのプロポーズがいけないとして、プロポーズのやり直しになるが、右左は改められてはいない。樋口氏は右左からそれぞれ回っていって結婚になるということは、結婚にルールのあったことを示すものであると説明されている。

女性からのプロポーズ　二神は右左からそれぞれまわられ、いきあったところで結婚となるが、この際イザナミノミコトが先に「ああなんといい男でしょう」、ついでイザナギノミコトが「ああなんといいおとめでしょう」と声をかけあって結婚にいたる。夫唱婦随であったわけである。

『古事記』は二神が声をかけあったすぐ後、イザナギノミコトは女神に「女が先に言葉を発したのは良くない」と仰せられたとしているが、しかしすぐ結婚された。

生まれた子供は健康体の子供ではなかったことから、「今生みし子よからず、天つ神の御所に申すべし」ということで指図を仰がれた。その結果、女性からのプロポーズであったからよくなかったとして、プロポーズのやり直しとなった。

『日本書紀』一書（第二）に「女神が先に喜びの言葉をいわれた。それが陰陽の道理にかなっていなかった。そのため「ひるこ」が生まれた」としている。やり直しで、男性からのプロポーズとなったことによって、今度は順調に次々に国土の誕生となるのである。夫唱婦随によって順調によくいったことを述べている。日本固有の姿が女性から先のプロポーズであったのだろうか。健康体でなかった子供の誕生ということを儒教の影響を受けた『古事記』の作者が、婦唱夫随が悪かったからだとしたのであろうか。儒教思想の強調の現れとしてとらえることができるように思うのである。

『日本書紀』では一書（第二）にこういっているとして、日と月とが生まれた後に「ヒルコ」が生まれた。3つになっても脚が立たなかった。はじめ二神が柱を回られたときに、女神が先に喜びの言葉をいわれた。それが陰陽の道理にかなっていなかった。そのため「ヒルコ」が生まれた。次いでスサノオノミコトが生まれたとあり、『古事記』と「ヒルコ」の生まれた順序のこととなることが書かれており、その前に日・月の神がお生まれになっていることからすると、ヒルコの生まれたこと以上に、女神がプロポーズのみならず喜びの声を言われたのははっきり陰陽の道理・儒教の道理に反していることの強調であるように考えられ、注目に値する。プロポーズは女からするものでなく、男からするものであると、教えているのだろうか。

こころみに、年上のしかも給料が遥かに高い姉さん女房と結婚している夫のセックスは、うまくいかないように書いた作品を見たりすることがあるが、女性に頭があがらない男性の性は駄目になって

しまうのだろうか。こんなことが女性のプロポーズ、リードが「いけない」とタブーとしたのだろうか。このへんに陰・陽の原理が秘められているとしているのだろうか。

また「ヒルコ」が生まれたことは近親結婚によるものであろうと考えられるのであるが、きょうだい婚であったといわれる二神の結婚では、そのようなことがありえたであろう。長い間の経験から学んで、近親結婚をタブーにすることとなったと思うが、そうではなく男女の関係の最初のタブーが儒教の道理から出てきていることに注意しておきたいように思う。

儒教の影響を受けながら女性のあり方が作られていくが、それ以前には女性からのプロポーズが先であっても、すこしも自然に反することではなかったのではないだろうか。

2．アマテラス大神とスサノオノミコト

女性の武装　『古事記』によると、アマテラス大神は高天原を、ツキヨミノミコトには夜の世界を、スサノオノミコトには海原をそれぞれ治めることを任されたが、スサノオノミコトだけはお言葉に従わず泣きわめいていられた。イザナギノミコトはなぜ命に従わず泣いているのかと尋ねられた。私は母のいられる根の国に行きたくて泣いていると答えられた。イザナギノミコトはひどく怒られて、あなたはこの国に住んではならないと仰せられて、スサノオノミコトを追放なさった。スサノオノミコトはアマテラス大神に事情を申し上げてから根の国に参りたいと言われ高天原に赴かれるが、その勢いがものすごく、天地鳴動、国土震動した。アマテラス大神は驚かれ、善良な心ではなく、私の国を奪いにくるに違いないと申されて、武装をなさって雄雄しく勇ましい態度で待ち受けられた。このことは男神に劣ることのないお姿ではなかったかと思われる。アマテラス大神が武装され、もっとも荒々しいスサノオノミコトに対されたことは、そこに男性に劣ることのない女性の姿をみることができやしないだろうか。

三人の女神と五人の男神　アマテラス大神は、なぜ上がってこられたかと問われ、スサノオノミコトは事情を申し上げるために参りました。謀反の心などもっておりませんと答えられた。ここで心の潔白を証明することとなり、誓約（うけい）をおこない子供を生みましょうと言うことになった。

アマテラス大神は、スサノオノミコトの帯びている剣は受け取られて、３つに折られて噛んで砕かれ吐き出されると、息の霧の中から３人の女神がお生まれになった。ついで、スサノオノミコトは、アマテラス大神の左の御髪（みずら）に巻いておられた勾玉を受け取られ、噛み砕かれて吐き出された息の霧の中から５人の男神がお生まれになった。アマテラス大神は、「私の玉から生まれた５人の男神は私の子供です。貴女の剣から生まれた３人の女神は貴女の子供です」と区別なさった。スサノオノミコトは、「我が心が清くあかき故に我が生みし子は女の子を得た。これにより自ずから我勝ちぬ」といって乱暴をはたらいたのである。

女神の誕生の勝利　誓約は本来女が生まれると邪心、男が生まれると清き心というよう決めておいてからおこなうのが普通であろうが、『日本書紀』は男が生まれたら勝ちと決めてスサノオノミコトの勝利を記し、『古事記』とは反対になっている。『古事記』では事前に決めたこともなく、しかも

『日本書紀』とは反対に女神が生まれた事が勝利とされているのは、『古事記』の書かれた時代は女帝時代（持統、元明、元正）であったことと関係があったのだろうか。「わが心が潔白で明るい証拠として、わが生みし子はやさしい女の子でした。うけいはわが勝利でした」と記されているところをみると、むしろ男性より女性が尊重されていたことを示すものとして捉えられるのではないだろうか。女性優位から、中国思想の影響で男性優位に改めたのは、中国史書の体裁をとっている『日本書紀』としては当然であったのかもしれない。

数字３と５　現在の私どもの生活を３と５や７の数が律しているといえる。３と５と７の数そのものの生活であるといってもよいのかもしれない。いわば聖数なのである。その紀元は３人の女神の３、５人の男神から５、そして七夕の女神の７であるといわれている。３は３人の女神からして女の数字と考えられる。３３手拍子、３本じめ、時の声（エイエイオウ）、７５３、３３７拍子、３人寄れば云々、３３９ど（さんさんくど）、３人官女、３度目の正直等数えるに暇がない。

例えば剣から生まれた３人の女神は、剣に関係して軍神であり、３声のトキの声は３女神に勝利をお願いすることであり、勝利の報告を意味するといわれることからしても、女性の数字としての意味を持っているといってもよいのではなかろうか。

また、５は５人の男神から男の数といわれ、５７５（俳句）、５枚１組（ヨーロッパ６枚１組）５人ばやし、７５３の男の子の５才のお祝いなどは整数５として、しかも男の数字として大事な数とされている。

七夕の女神からの７の数も女の数として、私どもの生活上基準とされる大事な数とされている。５７５７７（和歌）、７つのお祝い（女の子）７つの子（カラス）などはその一例といえる。５７５７７の和歌は女性向きの文芸、５７５の俳句は男向きの文芸と言われるのは、７が多いか５が多いかによるきめ方なのであろう。

女の数である聖数３と７は、男の数５一つに対して二つである点からしても、女性の優位の現れかと見てよいのではなかろうか。７５３のお祝いは、女の子は２回のお祝いに対して男の子のお祝いは１回であるということもそのことを示しているものと考えてもよいであろう。新年を祝う門松の竹は、長さが７５３の割合によって作られているのも同様に見られる。（竹の表の青と中側の白は男の色といわれ、血や火、地の赤と黒は女のいろという。唇や色白の身体に血の赤みの鮮明な女性は、今日のエイズと同じように恐れられていたものが、回虫等の寄生虫であって、赤が鮮明な女性は寄生虫がいないことの証拠で、栄養が足の方にもまわり、すらっとした美人になったとも言われている。

３．アメノウズメノミコト

女性の神がかりしての踊り　アマテラス大神が、スサノオノミコトの乱暴な振るまいを怒られて天の岩戸におかくれになった。世の中は真っ暗になり、悪霊が世を乱した。神々は大変困って相談され、策を講ぜられた。ここに登場するのがアメノウズメノミコトであった。天の香具山の榊が用意され、勾玉をとうして紐をつくり、枝に掛け、中央の枝に「やたのかがみ」をかけ、下の枝に白と青（とも

に男の色、鏡（アマテラス大神がうつる）の下には男の色で対応か）の布はくをたれて、各種の品を幣にて捧げ、祝詞を唱え、アメノタジカラオノミコトが岩戸のそばにかくれ、アメノウズメが天の香具山のひかげのかずれを襷にかけ、まさきのかずらを髪にまとい、笹の葉を手に持って、天の岩屋の前に桶を伏せてこれを踏みならし、神ががりして「胸乳（むなち）をかきいで、裳緒（もひも）をほとにおし垂れき。ここに高天原動（とよ）みて八百万（やほよろず）の神共に笑いき」とある。この踊りは神がかりしてストリップのような踊りで、しずんでいた神々を朗らかに導き、アマテラス大神をも岩戸からおみちびかれるもととなった。

女性と嫉妬心　アマテラス大神は、神々の笑い声を不思議に思われて、岩戸を少し開けられ、「私がここにこもって真っ暗なのに、アメノウズメが踊り、神々は皆笑っているのだろうか」と仰せられた。アメノウズメは、「あなたに勝る尊い神様がおいでですので踊り、笑っているのです」と答えられ、鏡を差し出す。大神は鏡を岩戸から出られて覗かれた。タジカラオノミコトが大神の手をとって外におつれした。アメノウズメが女神だけに女心がわかり、大神の嫉妬心をくすぐったのであろうか。

嫉妬は男にも女と同じようにあるものであろうが、後世女の特性のようにされてしまった嫉妬が、『古事記』のなかに、このように女性の固有の姿として書かれていることをみることができるのである。

鏡に写った男の色、青と白に囲まれた女神を自分とは違う女神の姿と考えられたのだろうか。神様だからわからないものはないとは思うが、知らなかったがゆえに嫉妬されたのであろう。

神がかりの女性　アメノウズメが「神がかり」してとは、神の霊力がのりうつったことをしめしている。このことが女性が神に仕えることのできる元となり、巫女（シャーマン）の起源になったといえる。神話は女性は神がかりすることから神に仕えることができることを教えてくれる。

明るさと喜びを与える女神　世の中が真っ暗になり、悪者が世を乱したためすっかり困りぬいて不安にかられ、しずんでいた神々の不安を、特殊な踊りで解消し、しずんでいた神々に喜びを提供してくれたのが女神だったのである。

また、ニニギノミコトの天孫降臨に際し、先払いの神が「1人の神が分かれ道におり、長い鼻、7尺の身長、目は赤ほうづきのように照り輝いている」。眼光鋭く尋ねることができなかったという。そこで大神は、アメノウズメに特に勅して言われるのに、「あなたは弱い女であるが、向き合った神に対して、気おくれせず圧倒できる神である。だからあなたは一人で行ってその神に向かって、天の神の御子の天降りする道にそのように出ているのはだれかと尋ねなさい」（『古事記』）と、アメノウズメはそこで胸をあらはにむき出して、腰紐をへそのしたまで押し下げ、嘲笑って向かい合った（『日本書紀』）。こうしてサルタヒコノカミは、アメノウズメに屈してニニギノミコトの天孫降臨は成功するのである。か弱い女性とはいえ、女としての自信、女であることの誇りを自他（アメノウズメとアマテラス大神）ともに認め、女性のみのもつ特性を生かして、その魅力によって、邪眼に打ち勝ち、喜んで道案内をさせることに成功した女の力の大きいことを、このことは教えているのである。多くの人々、特に男達に対して明るさと、楽しみと喜びを生み出し提供してくれるのが女性の特性だっ

たことを、神話をとおして知ることができるように思うのである。

ところで笑いについてはどのように考えられていただろうか。「皆さんこの男を笑ってやっておくんなさい」ということがあるが、これによってその男の罪が許されることを意味することのようである。罪が笑いによって吹き飛ばされると解されるのである。汚れを水に流す、禊と同じ意味として考えられやしないか。アメノウズメが神々や、サルタヒコノカミを笑いに誘い、悪霊や邪悪を笑いとばしたことと理解できるとすれば、女性は偉大な力の持ち主であることを神話は教えてくれる。今日家庭や職場におけるお母さん、女性への大きな期待がわかるような気がする。家庭の幸せ、職場の明るさを知り、家族、職場の人々にやる気を起こさせることのできる女性なればこそできる役割の１つとして考えてもよいのではなかろうか。

む　す　び

以上『古事記』、『日本書紀』を中心として女神（女性）の生きた姿を探ってみた。女神は神なるが故に男神に劣ったところがないのかも知れないが、実に生き生きと、男性に決して劣ることなく、むしろ優位に、しかも男性を動かす存在として登場してくるのである。かって「原始女性は太陽だった」などと言われたように、神話は女性を地位の高い、しかも力をもった女性として描いているのである。

参考文献

古事記・日本書紀　講談社学術文庫

日本神話からの贈物　渡部昇一　ＰＨＰ

日本人はなぜ水に流したがるのか　樋口清之　ＰＨＰ

日本人の育ての知恵　樋口清之　ＰＨＰ

数の不思議・色の謎　北沢方邦　広済堂